真っ白城*なんでも屋

魅紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真っ白城＊なんでも屋

【Ｎコード】
Ｎ３３６９Ｃ

【作者名】
魅紅

【あらすじ】
どうしようもない悩みを持つ人のみ行くことのできる、なんでも屋。いつの間にか、悩みを持つ者の心が真っ白城のなんでも屋き引き寄せられる。そこには、裸足の女の子と、ビーチサンダルを履いた少女がいて、その悩みを解決してくれるそうだ。２人共、何をやっても万能選手。とくに少女には未知の力があったりする。

白色×依頼人（前書き）

遅くなるかもしれませんが、ゆっくりでも、しっかり投稿しようと思います。よろしくお願いします。

白色×依頼人

ガチャ
「ハイこちらなんでも屋です。」
聞こえたのはまだ幼く可愛らしい女の子の声。親戚の家にかけようとしていたのに…どうやら間違い電話をしてしまったらしい。私が電話をしようとしていた親戚には、小さな子がとくにいない。
「え…あ、スミマセン。間違えたみたいです。本当にスミマセン…」
受話器を耳から離そうとしたとき言い始めた。
「間違えてないです。だって、あなたの心の不安や心配、助けて欲しいという気持ちがここへ導いたはずだから。」
「…？」
「あなたはここを必要としていますね。悩みを教えてみてくださいな」
なんだか、心を見透かされた気分になった。なんだか怖くなった。
悩みはある。だか、話す気になれない。
「あの…悩みとか、そういうもの、ないですから…」
言って、すぐ切った。

ーでも、あなたの心はどうしようもない悩みがあると言ってるんです。ー

幼い、響く声が耳元で聞こえた気がした。
その声で、あの時の映像が蘇ってくる。3年前に起こった、決して、人には話せないこと。呪いゲームのことが。

‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡

何処からか持ってきた、ゲームソフト。毎日真剣になって、ボタン

を押してる私の子供。
ポチポチーポチポチー。食器を洗うわたしの後ろからは、その音ばかりが聞こえる。だがそんな平凡、あっという間にこわされてしまう。
『え！？！？なんでー…』
それはいきなりの事。どうしたのか、と、振り返った時にはもう、真っ暗なテレビ画面に子供が白い手につかまれて引きずり込まれて行くだけ。
『んなっ？？！！』
私は駆け寄ってそれをとめようとしたのだか…テレビ画面はもう、真っ暗なただのテレビにもどっていた。
呆然と立ち尽くしてから、ゆっくり膝をつき、手をついてー…

‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡‡

思い出し、目を閉じた。途端に、瞼の向こうが急に明るくなった気がして、目をパッとあけてみる。
「あっ、あれ？」
真っ白い壁、真っ白い床真っ白い天井。真っ白い椅子、真っ白いテーブル、真っ白い扉。
「…こっ、ここどこ！！！…なにこれ。なにこれ。なにこれ！！！」
いつの間にか、私は真っ白なその部屋に居たのでした。キョロキョロと周りをみまわしていると…。
…ひたひたひたひた…
誰かが…歩いてくる！？足音が真っ白い扉の向こうから響いてくる…。ひたひたひたひたひた…
ヒタッヒタッヒタッヒタッヒタッ…
はっ…走ってるぅ？？？にっ逃げらんない。怖い！！

白色×真っ白城

ギィ。パタン。でてきたのは…裸足の…女の子。染めてあるのか、青い色の髪の毛を耳の下で小さく無理やりしばったショートヘア。超ミニなスカートをはいていて、スパッツがチラチラみえる。上は白の半袖。その子は大きく伸びをしてから、

「やっぱり、きたね。」

とひとこと。

「あっ。」

その声は、電話で聞いた幼い声だった。

それにしても、やっぱり、とは…まさかなんでも屋!?

「そぅ。ここがなんでも屋。」

心を読まれたかと錯覚するような一言。

…ペタン。ペタン。ペタン。ペタン。…

「あっ来た来た☆★」

ギギ…パタン。ビーチサンダルを履いている。膝までの半ズボンをはいている。上は黒いものを着ている。さらにその上から、季節にあわない体全体を覆うほどデカいコートを羽織っているので、ノースリーブか半袖かはわからないが。ファッションセンスは無いに近いと思う。身長はざっと１５０くらいと考えていい。

髪の毛は結構長い。恐らく、肩から１５センチくらいだろう。

「私はここの店長。宜しくね。」

にかっと笑うその笑顔ではなんだか心が落ち着いてしまう。

「どうぞ。掛けて。」

店長さんが、真っ白い椅子を指差していった。

「はい…。」

逆らっては行けない気がして、真っ白い椅子に腰掛ける。向かいに、店長と女の子が座った。

「ジャァ早速悩みを…」

「待って音虎（ネコ）」
女の子がしゃべりかけたことを、店長がとめた。
「…？わかったよ！」
ネコ？？この子の名前なのか？変わってるなぁ…。
「鼓　光夜。」
ビクッ。
「千代。君の息子の名前だね？」
「な…んで私の名前を？…光夜の名前を！！？」
すると店長はニコッと笑って、
「これが仕事なんだ。」
…いや、理由になってないしな。
「僕が君のことをよく知ってるから、君の心も安心してここに来たんだよ。悩み事も知ってるから。」「…勝手なこと言わないで下さい。」
落ちついてきた。だからしっかり言えた。
「何でこんなとこに来たか、なぜ、あなた達が私のこと知ってるかなんて分からない。でも非常識なことばっかりだし。…元の場所に戻して下さい。」
「…」
「…」
「…」
三人がソロって静かになる。沈黙をといたのは音虎だった。
「…あの、紅茶いれてきます。」扉から音虎が出ていった。途端に…それが合図立ったかのように店長が喋り出した。
「改めて。こういうものです。」
名刺をだされた。
　こう、書かれていた。

なんでも屋　店長
剣　莉子

「僕に任せてよ。コレ、生きがいだから。」

白色×真っ白城（後書き）

まだ頑張ろうと思いますが、どうでしょうか??感想お願いします。

白色×街

「はあぁあ。」
ため息をついた。あの後、なんだかんだ言って喋ってしまった。私の悩み。ポケットに、名刺と石。
『この石を大切に持っていてよ。僕は準備出来次第仕事をはじめるけど、もし、それまでに何か起こったら、この石に助けを求めてみて。その石が、君のこと。守ってくれるから。』
歩きながら私は、ポケットの上からその存在を確認して、またため息をついた。
（一体なんであんなとこに行ったんだろう。確か、目を閉じた瞬間。…部屋に居たはずなのにいつの間にか真っ白な部屋にいて…んー理解できないな。しかもその前の電話。番号間違えてなかったはずなんに。それと…あの店長さん、スゴく存在感あったなぁ。口調は結構穏やかだけど。）
あ。しまった。
考えことをしながら歩いていたら…どうやら道に迷ってしまったらしい…見知らぬ道に出てしまった。
む。困ったぞ…

人に道を訊こうかと、人に近づいた。
「あの、すいません。道に迷っ…」
スルーされた。ひっど。まぁ。人を間違えただけ。違う人に聞けばいいわ。
私は、ほったて小屋で休んでる人に訊いてみた。
「すいません、道に迷ってしまったのですが、＃＊＆￡☆駅はどう行けば宜しいでしょうか？」

無視。
どころか、こちらを見ようともしない。
また他の人に訊こうか、と思ったところで不思議なことに気づく。
今は夏だ。太陽はギンギンに強い光を放っている。暑いとてつもなく暑い。なのに、何でみんな厚着なのか。そしてなぜ、暗い表情なのか。
ここには来ては行けなかった場所のようにに感じた。
本能が　逃げろ　と言う。
どこでもいいから、走りまくってれば、きっといつか知ってる道に出るはずだよね。
走った。
走った。
走った。
でも、またおかしい事を発見した。どこをどう行っても、さっき道を訊いたほったて小屋のとこに来てしまう。体中にかいているこの汗は、きっともう、冷や汗もでている。
なんでっ。
なんでなんで？？？

またしても、戻ってきたこの道で、私はもうしゃがみこんだ。
疲れた。
そのときのことだった。
「…」
トントンと、肩を叩かれた。ビックリして振り返る。知らない人がたっていた。その人は他の人と同じように厚着だった。でも、汗びっしょりだった。
「あ。な、なんですかっ…ーっ！？」
いきなり、口をふさがれた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3369c/

真っ白城*なんでも屋

2010年10月26日03時40分発行